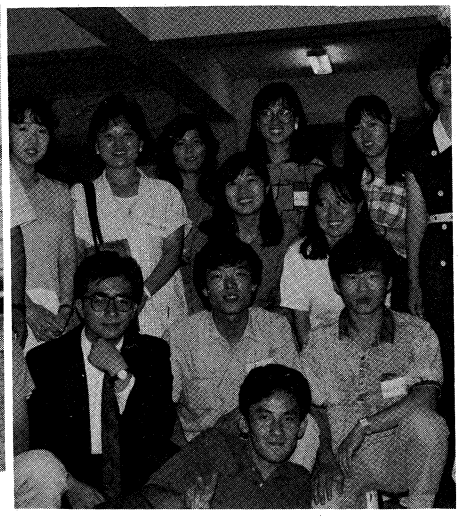
INTERNATIONAL EXCHANGE PROGRAM COMMITTEE

KUMAMOTO UNIVERSITY OF COMMERCE
KUMAMOTO JUNIOR COLLEGE

国際交流レター　第8号

米国・韓国からの研修団本学訪問相次ぐ



天草観光を楽しむモンタナ研修団員（左）

笑顔で本学学生と交流の輪を広げる大田大学研修団員（右）

CONTENTS

第3回モンタナ研修団24名来熊 …… 2
第1回大田大学研修団40名来学 …… 6
交換教授姉妹校滞在印象記…… 10
モンタナ短期留学生報告記…… 12
親愛なる熊本の皆さんへ …… 14
研修団第1回リユニオン開かれる…… 15
昭和62年度留学生 …… 15
研究所間の学術交流始まる…… 16
国際交流の新たな飛躍…… 17
1987年国際交流EVENTS …… 17
国際交流室新メンバーでスタート！…… 17

'87.11.1　熊本商科大学・熊本短期大学国際交流委員会

第3回モンタナ研修団24名来熊
ー多彩なプログラムで交流ー

モンタナ研修団を迎えて

経済学部教授（実行委員長）
西　田　勝　喜

今夏の第3回モンタナ研修団（引率者　R・アンダーソン准教授、女性14名、男性9名）はMSUとUMのビジネス、マネジメント専攻の学生を中心に編成され、6月18日〜7月16日の期間に亘って滞日し、来熊（23日）後のスケジュールを精力的に消化していった。

国際交流委員会内の受入れ実行委員会は、研修スケジュール立案に際して、日本紹介レクチュア（5講義）とその間のホームステイ（学生中心）、企業体験インターンシップ（ウィークデー1週間）、及び、その前後に配した、諸表敬訪問、観光旅行と海浜体験（天草）の3つを主な内容とし、受入れ準備を行なった。その際、国際交流委員会は出来るだけ裏方に徹して、レクチュア、ホームステイ等への協力を広く学内に求め、それらを通じて国際交流の内実を全学的に定着させていこう、というのが我々の方針であった。

研修団と受入れ企業等の反応は大旨良好であったと受けとめているのだが、他面で、学内の反応は如何なものだったのだろうか？学生間交流を軸に準備された大田大学学生訪問団との交流が引続いて経験されただけに、とくに学生諸君の反応はどうだったのだろう？

（交流を深めた研修団の一行）

日本での研修を終えて

最高の1ヶ月間

MSU　ジョン　レオナルド

日本で過ごした1ヶ月間は信じ難い程素晴らしいものでした。親切で寛大で本当に良くして下さった熊本商科大学・熊本短期大学の先生方や九州電力の方々、そしてホストファミリーに対する感謝の気持ちは、とても言葉では言い表せません。こちらの大学で受けた講義は大変素晴らしく興味深いものでした。もっと多くの講義を聴きたいと思った程です。講義をして下さった先生方に心から感謝します。

ホストファミリーの田中さん一家は、とても親切で寛大で、ホームステイの間、心から僕を受け入れ、本当に家族の一員として扱って下さいました。お蔭で田中さん一家と過ごした1週間は楽しく、また、多くのことを学

ぶことができました。九州電力での1週間は只々「素晴らしい」の一語に尽きます。僕のために多くの時間と費用を割いて、日本の企業や日本の文化について勉強させて下さいました。

このプログラムを通して見聞を広め、貴重な友人を得ることができました。この様な生涯忘れることのできない素晴らしい経験の機会を与えて下さったことに対し、心から感謝します。

家族の一員として

MSU　**シェリー　カーン**

1ヶ月の間に、私は多くの貴重な経験をさせて戴きました。沢山の名所を見ましたが、どこも珍しく、興味をそそられました。また多くの日本の人々に出会い、楽しい時を過ごしました。日本での経験で特に心に残っているのは、ホームステイで得た人々との交流です。それは、単なる観光では得られない日本の文化を学ぶ機会を与えてくれました。日本人がどのような生活をし、行動し、食事をし、楽しんでいるかを自分の目で見ることができました。これは、この交流プログラムを通して得ることのできる最も貴重な経験ではないかと思います。ホストファミリーとは、言葉の壁はあったけれど、お互いに気持ちが通じ合い、家族の一員であると感じることができました。私は日本滞在中、三軒のお宅にお世話になりましたが、各家庭はそれぞれ随分異なっていました。あるお宅では仏教を熱心に信仰しておられて、その様子を見学することができ、またお客さんとしてではなく、家族の一員として迎え入れられました。これは本当に素晴らしい経験でした。

熊本商科大学・熊本短期大学とモンタナの交流プログラムは成功だと思います。このプログラムは、学生に単なる観光では得ることのできない貴重な経験の機会を与えてくれる点で、とても素晴らしいものです。今回のプログラムは、とてもよく計画されていて、学生の興味、関心の分野がよく汲んであったと思います。

ホームステイで得た友情

MSU　**ステファニー　マレイ**

このプログラムの中でホームステイを経験できたということは、私にとってとても素晴らしいことでした。本当の日本の文化は、人々を通して学ぶのが一番だと思うからです。私がお世話になった本田さん一家は素晴らしく、私が楽しく快適に過ごせるようにいろいろ配慮して下さいました。また、ご自分達自身も英語の勉強をしながら、私に日本語を教えたりもして下さいました。

長い目で見れば、戦争や紛争を防ぐには、人々の相互理解を図るのが最良の方法だと思います。友情が育まれれば、国家間の関係がより親密になって、人々は友人を経済的にも肉体的にも傷つけようとは思わなくなるでしょう。

今回のプログラムを通して、多くの知己を得、また友情も芽生えました。モンタナと熊本の距離は遠く離れていても、この友情は長く続いていくと思います。私は幸運にも、とても居心地の良い家庭に入りましたが、たとえそうでなかったとしても、日本の家庭生活を体験する機会はとても貴重です。二つの国

の家庭生活を比較するのは、とても興味深いものです。私のホストファミリーは一緒に何かをしたり考えを分かち合ったりすることが好きな点では、モンタナの家族ととても似通っていましたが、毎日の過ごし方や生活様式の点では、まるで違っていました。本当にホームステイでは多くのことを学ぶことができました。この1週間を通して、世界中で、少なくともビリングスと熊本という二つの地域が、以前よりも親密になったことは確かです。

日米の販売方式の違い

MSU　**ビル　ニーマン**

トヨタカローラでの企業研修は、僕にとって素晴らしいものでした。日本における独特の販売方式について学び、またトヨタカローラで行われている集団帰属意識を高める日本式経営も学びました。特に、研修最終日に参加したQC会議の終わりに歌われていたQCソングが気に入りました。

不思議なのは、米国では必ずと言って良い程、客の方が販売店へ出掛けて行くのに、日本ではセールスマンが訪問販売をしていることです。これは日本と米国の社会構造の違いを反映しているものと思われます。

トヨタカローラの方々は、親切なうえに、英語を話されるので、僕の疑問の多くは解決することができました。

期待以上の企業研修

UM　**トニー　ルブレヒト**

この交流プログラムは、米国の学生にとって非常に素晴らしいものです。1週間のホームステイでは、日本の家庭生活について学ぶことができました。私のホームステイ先は、日本の伝統的な家庭、即ち、直系大家族のご家庭で、大変な歓迎を受けました。家族の中に英語を話される方がお二人おられて、私に日本語を教えて下さいました。

企業研修の1週間は、忘れることができません。日本たばこ産業では、賓客であるかのように迎えていただき、日本企業について随分勉強させていただきました。特に興味を抱いたのは、終身雇用、ジャスト・イン・タイム在庫管理、ボトム・アップ式経営、そして日本企業に於ける女性の役割でしたが、今回の研修で、これらの分野に関する知識が期待以上に得られました。

お世話になった企業

学生の企業体験研修では、次の企業・官庁にお世話になりました。ご協力に対し、厚く御礼申し上げます。

㈱岩田屋伊勢丹　九州電力㈱
㈱熊本相互銀行　㈱熊本日日新聞社
熊本県庁　熊本市役所
㈱熊本放送　㈱寿屋
㈱熊本ホテルキャッスル　金剛㈱
㈱地域情報センター　㈱鶴屋百貨店
トヨタカローラ熊本㈱　西田鉄工㈱
日本銀行熊本支店　日本たばこ産業㈱
㈱ニュースカイホテル　㈱肥後銀行
平田機工㈱　㈱ユニードダイエー

モンタナ研修団日程表

月　日	朝	昼	夜	宿　泊
6／18（Thu）	成田到着	東京都内観光		代々木ユース
19（Fri）	大使館訪問			〃
20（Sat）	一　日　自　由　行　動			〃
21（Sun）	東京　→　京都（新幹線）			京都第２タワーホテル
22（Mon）	一　日　自　由　行　動			〃
23（Tue）	京都　→　広島　→　博多（新幹線）		歓迎会	県青年会館
24（Wed）	大学表敬訪問・市長表敬訪問			〃
25（Thu）		県庁表敬訪問		〃
26（Fri）	熊本放送見学			〃
27（Sat）		学生とのスポーツ交歓会	学生主催パーティー	パークホテル
28（Sun）	一　日　自　由　行　動			〃
29（Mon）	講義　日本の女性問題・坂岡先生			ホームステイ
30（Tue）	講義　日本の政治　・落合先生			〃
7／1（Wed）	講義　日本の経営　・嵯峨先生			〃
2（Thu）	講義　日本の経済　・岡本先生			〃
3（Fri）	講演　日本について　・Ellis氏			〃
4（Sat）	一　日　自　由　行　動			〃
5（Sun）	〃			〃
6（Mon）	企　業　体　験　研　修			企　業
7（Tue）	〃			〃
8（Wed）	〃			〃
9（Thu）	〃			〃
10（Fri）	〃			〃
11（Sat）	商大集合　→　天草・高浜			茶碗屋（天草）
12（Sun）	天草			〃
13（Mon）	〃			〃
14（Tue）	天草　→　熊本		お別れパーティー	県青年会館
15（Wed）	一　日　自　由　行　動			〃
16（Thu）	熊本　→　福岡　→　成田出発			

ようこそ本学へ
第1回大田大学研修団40名来学

大田大学研修団を迎えて

教養部教授（実行委員長）
永　末　嘉　孝

60年6月、姉妹校となった韓国・大田大学から、初めて学生35（男22、女13）名、教職員5名、計40名の研修団を迎えた。

一行は7月18日から23日まで、わずか5泊6日ではあったが、学生、教職員との交流、ホームステイ、或いはＲＫＫ、本田技研等の見学、更には阿蘇、天草等の遊覧と、活発な交流、研修を行った。

接待役を務めた者として、種々の感想があるが、ここでは、もっとも印象深かったＲＫＫ訪問時のことを紹介しよう。

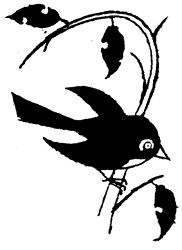
ＲＫＫでは、水野社長を始め、重役、社員10余名が応接してくれ、ＲＫＫの歴史や経営内容の説明と質疑応答（約1時間）、その後、ラジオ局、テレビ局の見学、最後に昼食をご馳走になった。

圧巻は質疑応答の際であった。韓国の学生たちは「社員の採用方法は如何」「男女雇用条件は真実平等であるのか」「テレビコマーシャルで西洋人が頻繁に登場するのは何故か」等々、率直且つきびしい質問を展開した。特に最後のそれは、私には、「西洋人＝高級な人間」という思考をチクリと刺すものに思えた。しかし、一方「ホームステイで、今日はＲＫＫ見学、テレビに出るから見てくれるよう言って来た。是非、僕の顔を大写してください」と言い出す者がおり、と、すぐ続いて「君のような顔が韓国人と思われたら困る。僕の顔も大写で……」と言い出す者。終には「僕も……、私も……」となってしまい、社長以下、大笑いする場面もあった。

結局、ＲＫＫは全団員ばかりか、案内役の私たちまで、5、6人ずつ、例のニュースキャスター席に坐らせ、一人びとりにメッセージを言わせて、一巻のビデオを作成、おみやげにもたせてくれたのである。

彼らは、実に伸び伸び、生き生きとしており、その上、何か強い、しっかりしたものをもっているようであった。あえて言えば、隣国の若者たちは、日本の若者以上に若者であったのである。しかし、このことは、逆に、私にとって、「韓国は近くて遠い国」でしかなかったと思いしらされることでもあった。

最後に、前期試験や県職採用試験と重なったにもかかわらず、今回の交流活動に積極的に参加してくださった関係者、とりわけ、学生自治会役員、岩野ゼミ、中野（い）ゼミ等の学生諸君に深謝し、併せて、今後とも、姉妹校関係を深めるため、尚一層の活動をお願いする次第である。



日本研修の引率を終えて

大田大学教授
韓　鎮　錫

大田大学日本訪問研修団員は、まず、熊本商科大学に感謝の意を表します。

私達は、7月18日から23日までの6日間、熊本を中心に大学と産業全般を見学し、日本人の生活を始め発達する産業や、学生達の勉強姿勢を仔細にわたり見ることができました。そして、その生活の中の親切さ、勤勉さは勿論、こまやかな生活態度が今日の日本を建設したのだということを学びました。

私は今回研修団を率いるにあたり、ただの観光旅行にならぬよう、視察の焦点を絞るようにと指導しました。私自身これまで各国を訪問して、その国を理解し、その国に対する愛着を深め、自分の国のように思いやることが、これからの彼らの生活の中に国際的な幅広い思考方式をもたせることにつながると考えたためです。

今回の35名の研修団員は私の助言に従い、実に多くのことを体験しました。彼らの頭の中におぼろげながらも日本が理解でき、多くのことを学び、楽しい思い出を作ったと異口同音に言っています。

特に熊本商科大学の北古賀学長はじめ教授、職員のよく整った運営陣に讃辞を贈りたいと思います。一挙手一投足が事前協議と決定によって成るという点に長い歴史の中で着実に発展してきた足跡を読み取ることができました。特に国際交流委員会の教授、職員の皆さんの緻密な計画と実行は目をひくものでした。熊本商科大学では早くも国際交流が学生、教職員、学校の発展の一翼となっており、世界の中の熊本商科大学を実現しようという努力をよみとることができました。また、姉妹交流関係を続けて拡大していこうという努力も確信しました。

学校の施設面では、教授研究棟の別途建立や、その施設が大変すばらしいものであることに感銘を受けました。また高遊原研究所は学生の心身鍛練に大変良い所でした。私達研修団が心おきなくくつろいで過ごすことができたこともその施設のおかげであると思います。

観光では予定になかった天草国立公園を特別に許可して下さった点に感謝し、世界的な名所である阿蘇山を見ることができたことも私達に思い出深く残っています。

今、研修を終えて学生達は平常授業にはいりました。彼らの頭の中には日本の思い出が鮮やかに生涯納められることでしょう。

私は両校の姉妹提携が、他のどの大学の姉妹関係とも比べることのできない緊密な関係にあることを誇りに思います。このような緊密な学生・教授・学問の交流を通して、我々両校の関係はますます敦篤なものとなり、さらに相互発展の元肥となることを確信します。

日本人の生活を学ぶ

大田大学学生研修団長
朴　亨　夏

日本に行ったら、何を学び、何を感じてく

れば良いのだろうか。大田を出発する時、我々研修団の心中には不安と期待が入りまじって落ち着かなかった。釜山の金海空港で手続きをしながら、日韓の間に昔あった歴史上の事件は忘れて、短期間だが我々自身の目で研修しなければと考えていた。

日本の福岡空港に到着し、姉妹大学側からの暖かい心からの歓迎を受けた。初めて踏んだ日本の土地であったが、異国に来たという感じはせず、韓国と異なる生活環境を発見することは困難であった。我々研修団は姉妹校のバスに乗り、熊本学園に到着した。バスの中から見る日本の農村風景は、我が国の農村の姿を見るような思いがした。しかし時間が経つにつれて、日本人の綿密で用意周到な国民性を発見し、また彼等の職業意識の高さと礼儀正しさを知り、これが今日の経済大国に導いた一つの大きな要因となっていることを感じた。

家庭の中では、両親と子供達との間に交わされる気軽な会話の様子を目にした。商店街では、日本人独特の商法を直接肌で感じた。

短期間だった為、日本について余り多くのことを知ることはできなかったが、それなりに日本人の生活について沢山学んだ。そして、我が国の状態や自分達自身と比較して、少し恥ずかしい思いもした。

我々は、通常日本について、近くて遠い国だと考えてきた。しかし、これはもはや昔の歴史的観点（感情）だけのことである。これからは、韓国人としての主体性を持ちながら、我々相互の交流を通して受け入れるべきものは受け入れ、より発展的な考え方で自らを向上させねばならない。

終わりに、研修期間を通して我々研修団を暖かく迎えて下さった姉妹校の皆さんと、ホームステイをして下さった学生、先生達にもう一度感謝を申し上げたい。

名残りつきぬ思い出

国文学3年

金　陽　淳

「天気がもっとよかったら、日程がもっと長かったら」という名残つきない思いだけを残して、去る7月18日から23日まで5泊6日の日本姉妹校訪問日程を終えました。

韓国の場合、いまなお20歳代で海外旅行をすることは、そう滅多に在ることではありません。大学3年の夏休みであれば当然のこととして就職準備に万全を期さねばならない時であるため、今度の日本研修は、私の場合やさしいことではありませんでした。とくに大田大学が日本の権威ある熊本商科大学と姉妹提携を結び、さらに日本の学生達が本校を訪問したにもかかわらず、平素姉妹大学について特別の関心を向けてはいませんでした。しかし、ホームステイを始めとして、姉妹大学訪問、多くの学生、先生方に直接会ってみて、このような私の考えはだんだんと変わってきました。そこで感じた点は、第一に総じて彼等の生活態度が真面目であり、第二に多くの人達が親切であり、社会のそこここで、日本人が正直さをもって行動しているということでした。しかし、研修期間があまりにも短かった関係で、日本の文化や姉妹校の学生達の色々な生活状態、そして彼等が関心を持

っていること、考えていることなど、多くの部分をわからないまま帰って来ました。同時に難しいと思った点は、先ず第一に言語の壁という問題になりますが、やはり生活習慣の差異から来る不便さでした。しかし、このような難しいことがあっても、日本での研修はそんなに問題はありませんでした。というのは本校の朴教授が交換教授としておられたためもあり、姉妹大学の皆様方が物心両面から関心を傾けて下さったためでもあると思いました。

韓国の場合、すぐ9月1日になれば始業することになっています。学校が始まれば、私が知っている多くの大田大学の学生達に日本で見たり聞いたりして学んだことを話そうと思っています。同時に授業開始と一緒に日本の姉妹校の岩野先生が本校においでになり、日本研修期間にまだ十分学び得なかった多くのことについて、先生と大学を通じて知りたいと思います。

最後に、私にとって新しい認識の方法を持たせていただいた本校と姉妹関係である日本の権威ある商大の先生方に深い感謝の意を表したいと思います。

大田大学研修団日程表

月　日	朝	昼	夜	宿　　泊
7／18（Sat）	福岡着 → 熊本		歓迎会	高遊原研修所
19（Sun）	水前寺公園 → 県立体育館（少林拳20周年大会）		→ 天草	高遊原研修所
20（Mon）	県知事表敬訪問 → 学長表敬訪問	→ 学生間交流（バレーボール）		ホームステイ
21（Tue）	熊本放送 → 熊本城	→ 伝統工芸館	→ ショッピング（岩田屋伊勢丹）	高遊原研修所
22（Wed）	本田技研熊本工場 → 阿蘇山			高遊原研修所
23（Thu）	送別式　研修所発 → 福岡空港		離日	

交換教授姉妹校滞在印象記

モンタナの思い出

商学部教授　慶　田　　収

私が滞在したボーズマンは、北、東、南の三方を、見た感じ数百メートルぐらい（実際は2,000メートル以上）の山や丘で囲まれ、西は多少起伏のある牧草地や小麦畑が長く続き、遠くにロッキーの高い山脈が望まれていた。地図で見る山間部の盆地というよりも、むしろ平野部に小高い山や丘があるといった印象であった。モンタナは山国で、険しい山々におおわれたところと思って、気を引き締め、気負ってモンタナへ行ったのだが、州内のハイウェイを車で走ってみると、道路はだいたい直線的で、カーブするにしても緩やかで、これでもmountainousな州（WORLD ALMANACによると、MONTANAの名はラテン語あるいはスペイン語の“mountainous”から由来している）なのかと思ったほどである。日本的感覚からすれば、モンタナは“山国”という印象はあまりなく、なだらかな丘陵が続く、意外に平野部の多いところであった。

モンタナ州立大学で秋・冬の学期に日本語の講義を週4時間おこなった。日本語を受ける学生は、語学専攻の学生が大部分であったが、その動機はさまざまであった。高校生の時、モンタナ州と熊本県との交流プログラムで熊本に来たことがあり、これをきっかけに日本のことや日本語に興味を持つようになったとか、日本にはまだ行ったことはないけれども、日本のビジネスとか、空手に関心があっていずれは日本へ行ってみたいというようなことであった。日本語を教えるのは、初めてのことで容易ではなかったが、学生が白紙の状態から少しずつ日本語を覚えていく過程を見るのは、楽しくもあった。習得の速い学生は、積極的によく文章を作ったりしていたが、中には、最後まで主語、目的語、述語の語順に悩まされている学生もいたようだ。
私自身、この講義を通して外国語としての日本語の側面を知ることができて良かったと思っている。

モンタナ滞在の1年を振り返ると、商大のサマー研修プログラムも忘れられないことの一つである。研修団に随行して、研修団でなければできないようなモンタナのいろいろなところを訪問したり、見学したりして、学生だけでなく、私自身貴重な、また、楽しい体験ができた。また、以前商大に交換教授としてお見えになったドレンク氏宅でハロウィーンのためにパンプキンを彫ったり、ご家族と一緒に山へ2メートルもあるクリスマスのツリーをとりにいったのも楽しい思い出である。思い起こすと尽きないが、いろいろなことがあっという間に過ぎてしまった感じである。気持ちとしては、“もう一度モンタナへいってみたい、そしてカントリー・ミュージックを聞きながら、あの美しい大自然の中をドライブしてみたい”、そんな思いである。

〔昨年4月より本年3月までMSU滞在〕

日本の思い出

モンタナ州立大学助教授
ジョン　オコーネル

今、私の心の中は、あと２、３日で日本を離れるということで一杯である。もっと正確に言えば、この１１ケ月間に日本で暮らし、働き、旅行し、そして人々と交わって得た経験を後にするということで。正直言って、多少不満で、物足りない気がする。それは、私の滞在期間が切れ、「現実生活」に戻らねばならないせいではなく、私達家族が、熊本での生活に安定感を覚えたのは、ほんのここ３ケ月間だけだったからである。異国に長期間滞在すると、人は様々な適応と変化の段階を経て成長する。勿論、適応するということは、ある種の冒険であるが、一つ確実なことは、適応は肉体的、精神的、社会的に大変な重労働だということである。今まで心理学者として、生活に大きな変化を体験した人が自我を取り戻す手伝いをしてきた。その際、新しい環境に適応して自我を確立するには、一般的に６ケ月から一年かかると指導してきた。従って、現在いざ日本を離れるに当たって、完全に生活に溶け込むことができたとは言えないが、私自身の意識のうえでは、少なくとも異国での生活適応に成功したと思いたい。多分、何故私が物足りないと感ずるのか、おわかりであろう。一言で言って、一年は短か過ぎるのである。勿論、私達家族の努力は報いられたが、もし、ここにあと半年ないし一年さらに滞在できるなら、私達の生活がどの様になるか、その可能性を考えると満足できないのである。

この様に限られた紙面で、私の経験の全てをまとめることは不可能である。しかし、行動科学者の立場から、日本社会の心理的側面を注意深く観察した結果、家族の絆の強さ、特に年長者に対する心遣いと尊敬に強い感銘を受けた。また、終身雇用制については、これが個々人に安定感と安心感を与え、個人的目的の達成と自尊心を得るのに如何に必要不可欠なものになっているかを知った。他方、日本における若者の自殺率の高さは嘆かわしい限りである。余りにも早期に多くのことを求め過ぎているのではないだろうか。成功と達成の代償として、この犠牲は大き過ぎないだろうか。私はまた、日本の教育制度についての知識も得た。そして、教育改善の議論に非常に感心を持っている。古来よりの教育の目的は何ぞやという疑問について、日米を比較しながら考えてみた。もし、教育を通じて社会が向上するのであれば、その向上は生活の質であり、日本の教育制度は、この点で世界に貢献するものを持っている。しかしながら、もし教育の目的が自立した創造的思考の持ち主を育てるのであれば、日本の教育は不十分である。何れにせよ、改善改革というものは常に健全である。この点において、日本の積極性は評価されるべきである。特に本年は、日米間の教育制度を調査、検討するために教育者や科学者が正式に交換されている。これは国際協力の素晴らしい例であり、願わくば、これが人類の未来の幸福に繋がることを希望する。

日本での経験を一言でまとめると、文化は異なっても、人間は根本的に同じだということになる。私達家族は、一年間を熊本で過ごせて非常に幸運だった。この一年間に出会った方々、そして親切にして下さった方々、どうも有難う。日本、或いはモンタナにて再会できる日を楽しみにしています。

ＳＡＹＯＮＡＲＡ。

〔昨年９月より本年７月まで本学滞在〕

モンタナ短期留学生報告記

大学のシステムの違い

〔派遣先：キャロル大学２～４月〕

商学部４年　**安　岡　裕　明**

キャロル大学においての２ケ月間の留学生活は、私にとっていろいろな面において大変貴重な体験でした。人々は、とても気さくで親切で私を歓迎してくれました。

大学では、経営学、国際貿易、ベーシックコミュニケーションなどを履修しましたが、講義中の雰囲気、学生達の態度は、日本のそれと比較して相当な違いがありました。講義は、あたかもディスカッションのようで、学生達の熱心な態度が見られ、質問はほとんど全員の学生が、１回の講義に最低でも１回はしていました。多い人で、５回から８回ぐらい熱心に質問をすると言った具合で、学生の熱意は相当なものでした。この点一つを見ても日本とアメリカの大学のシステムの違いが見い出せます。レポート提出は週に２～３回もあり、小テストもたびたびあって、単位を修得する為には、常に日常の努力を要します。ウィークデーは、その為ほとんどの学生が夜も最低２～３時間机にむかっていました。常に自分の将来の夢に向けて各人努力しています。特に、自主独立の精神が強いと感じました。シアトルでホームステイをし、アメリカの生の家庭生活を体験しましたが、どの家族からも家庭の温かい雰囲気が満ちあふれて素晴らしいものでした。

日本を出て自国を見ると改めて良い面が見えてきますが、反面悪い面もずいぶん見えてきました。英語、文化、習慣、国民性など。より良い国交を保つには、先ずなによりもお互いの国情を理解することが大変重要であると痛感させられました。この多感な時に外国で生活できて私は幸せだと思います。同時にまだまだ視野を広げることが必要だと気付きました。この貴重な体験をステップに、更に勉強をしていろいろなことに努力していきたいと思います。

学びたいチャレンジ精神

〔派遣先：キャロル大学２～４月〕

教養科２年　**松　田　洋　子**

一面に広がる草原、ほんの少し山肌に残る雪、そして真青で大きな空。ああ、ここが夢にまでみたアメリカなんだ、と感動したことを今でも覚えています。

（キャロル大学の友人達に囲まれて）

キャロル大学に到着し、荷物の整理もつかないまま慌ただしく寮生活が始まりました。翌日からさっそく講義に参加しました。中でも特に、教授を囲んでの座談会の様な、コミ

ュニケーションで、体や口調、目で表現したり、人それぞれ考え方があるようにコミュニケーションにもいろいろあることを学びました。言葉が不十分でも何か伝わるものがあれば、それはもうコミュニケーションとなります。大切な事は、意志を伝えようとする気持ちだと思いました。

独立心が強く、あらゆるものに興味をもつ学生達は、勉強においても、遊びにおいてもいつもチャレンジしていきます。また、アメリカには日本のような「受験」がないので、自分がやりたいと思ったことは、まず実行できるチャンスが与えられています。そのため学生達は、自分の将来の為に努力し、夢に近づこうとします。そこが、私達日本の学生とは違うところです。これから先、私達が考え直していかなければならない問題のように思いました。

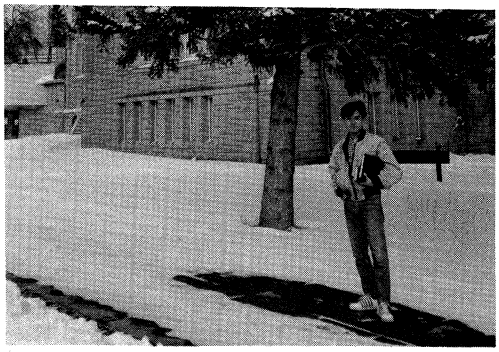
この短期留学で、語学の難しさを再認識し、生活する環境の違いからくる考え方の相違を肌で感じることができました。また、2ケ月間の滞在中寮生活をしていた為、たくさんのすてきな友達に囲まれて、楽しい思い出も数多くできました。全てが私にとって貴重な体験です。今後もこの素晴らしい体験をいかし、自分自身をもっと高める為に努力していきたいと思います。

勉強熱心なアメリカの学生

〔派遣先：ロッキーマウンテン大学2～4月〕

経済学部4年　**内田寅彦**

この文章を書いている今、短期留学を終えて半年が過ぎてしまった。モンタナでの写真を見ていると、そこでの生活が、昨日のこと



（ロッキーマウンテン大学にて）

のように思い出される。

わずか2ケ月間であったけど、そこで得たものは数多く、話で聞くよりも実際に現地へ行って、自分の目で見て、自分の膚で感じることが私にとって大変勉強になった。

この短期留学の目的の一つとして、以前から「アメリカの学生はどのような生活を送っているのか」ということが知りたかった。そして今回、それが少しでも理解できてよかったと思う。

アメリカの学生は勉強熱心であると言われているが、それは授業風景を見てなるほどと思った。私は国際貿易という4年生のクラスを選択していたが、約15名の生徒がいて、授業態度は真剣そのものだった。先生の話を熱心に聞き、自分のわからないところがあれば積極的に質問をし、納得のいくまで議論する。別にゼミのクラスではないけれど、学生の熱意に感心した。

また、大学の単位修得の方法が私たちの大学と少々違っている。1年を通して一つの科目の単位をとるのではなく、前期なら前期のうちに単位をとってしまうのである。だから週のうちに2～3回同じ授業があり、宿題やテストもたびたびある。そのような理由で、

アメリカの学生は勉強熱心に見え、実際そうなのである。

私がここに挙げたものは、ほんの一部の例にすぎないが、もちろん休日には日本の学生と同じように遊び回るし、考え方が幼い人もいれば、しっかりしている人もいる。ただ、民族性の違いからであろうか、考え方の相違、意見の食い違いが多少あった。しかし、この短期留学を通して、異国の人と触れ合い、異国の文化と接し、日本という国を外から見れたことは、他国を理解する上で大いに役に立ちそうである。

親愛なる熊本の皆さんへ
キャロル大学生日本滞在記

フランク　ホッジ
マリエッタ　ボーラー

熊本商科大学でリサーチをしたり、日本各地を旅行したり、私達は日本での10週間の夏を満喫した。今はキャロル大学で学生生活最後の年を送っている。モンタナに戻ってから、熊本での滞在や旅行のことを懐かしく思い出す。美しい国土、おいしい食べ物、そして親切な人々……。

私達二人にとって、これは初めての海外旅行だった。日本の文化と人々について学べるだけ学ぼうと、期待で胸ふくらませて5月末に熊本に到着した。リサーチをしたり、ホストファミリーの方々と共に生活しながら、各地の名所を見て回った。阿蘇山、水前寺公園、熊本城そして天草と、熊本には美しい所が沢山ある。

（お別れパーティーにて）

熊本の良いところは、そういった観光地だけではない。料理が素晴らしかった。帰国してから日本食が恋しくてたまらない。日本の料理はおいしくて、盛りつけも美しい。ホストファミリーや友達のおかげで、色々な料理を食べることができた。今でも時々おいしい日本の食べ物を食べたくてたまらなくなる。例えば『うなぎ』や『タコ焼き』など……。

私達のリサーチや旅行は、日本の人々の心遣いと親切がなかったならば、こんなに素晴らしいものにはならなかっただろう。九州、四国、本州、そして北海道、どこに行っても親切な人々に出逢った。

日本には長い伝統があり、沢山の美しい名所がある。そして料理もおいしい。これらは忘れることができない。しかし、一番忘れることができないのは日本の人々である。私達の滞在を素晴らしいものにして下さった皆さんに心から感謝している。ドウモアリガトウゴザイマシタ！

〔日本滞在期間は5／24～8／1〕

研修団第１回リユニオン開かれる

本学が、アメリカ・モンタナ州の９大学と姉妹校提携をしてから、すでに５年が経過した。この間、交換教員の派遣が、双方から２回ずつ、学生の短期留学が双方から４回ずつ、学生研修団の派遣が、アメリカから３回、日本から２回行われ、日米交流は軌道に乗ったといえる。

去る５月４日、今日の発展の礎となった本学第１回モンタナ研修団参加者の集いが、熊本市内の料亭で開催された。今回の集いは、研修団参加者２４名の全員が卒業し、社会人となったことから、モンタナ研修の意義を改めて問い直そうという自発的な呼び掛けが実現したものである。１３名の元研修生と、本学からは引率にあたった中野裕治、有本純両

先生をはじめ、関係者６名が出席し、近況報告やモンタナ研修の思い出とその後を語り合った。尽きない話により一層の連帯感を強め、後輩学生たちに語り伝えたいと『モンタナその後』論集を発行する話がまとまった。
乞うご期待！

昭和62年度　留学生

No.	在籍身分	氏　名	国籍（出身校）	受け入れ先・指導教員・研究題目
1	正規生 私費留学生	金　正　翰	韓　国 仁荷大附属高等学校	熊本商科大学商学部経営学科
2	正規生 私費留学生	周　佩　文	台　湾 台北市私立稲江高級護理家事職業学校	熊本商科大学商学部経営学科
3	正規生 私費留学生	楊　国　華	マレーシア ペナン　韓江中学校	熊本商科大学商学部経営学科
4	正規生 私費留学生	陳　亮　宏	台　湾 台南市私立長栄高級中学校	熊本商科大学経済学部経済学科
5	正規生 私費留学生	張　琍　姬	中　国 上海外国語学院	熊本商科大学商学部商学科第一部
6	正規生 私費留学生	林　鑫　生	台　湾 台湾省立大甲高級中学	熊本商科大学商学部経営学科
7	研究生 県費留学生	武内マイケル五郎	アメリカ サンタバーバラ市立大学	熊本短期大学社会科第一部 野見山　俊一 保健体育

研究所間の学術交流始まる

本年6月、本学海外事情研究所と中国・深圳大学特区経済研究所との間に、また本学産業経営研究所及び海外事情研究所とオーストリア・ウィーン大学日本学研究所との間に、学術交流協定が締結された。

深圳大学経済研究所との姉妹提携

海外事情研究所常任委員　**岡　本　恵　也**

今年6月、海外事情研究所所長、田島司郎教授と常任委員の私は、中国経済特別区である深圳にある深圳大学を訪問し、両研究所の学術交流協定に調印してきました。この8月には、この協定に基づいて、田島所長と中野裕治常任委員とが深圳大学研究所と共同で、深圳の日・中合弁企業の実態調査を行ないました。来年度は、深圳大学研究所が本校を訪ね、共同研究を行なうことになっております。海外事情研究所がその本来の性格にふさわしい事業にはじめて着手しえた意義深い姉妹提携と考えております。今後さらに日・中経済、特に熊本地場企業と深圳経済特別区との経済交流の発展に、両研究所の姉妹提携が貢献しえることを念じております。

わが夢の街ウィーン

産業経営研究所所長　**中　楯　　興**

音楽と芸術の都ウイーン。ウイーン大学は、ドイツ語圏最古の大学であり、わが国では、音楽芸術大学が一般に有名であるが、経済学や哲学等の分野においても著名な学者を出しており、その建物も歴史の重みを感じさせる堂々たるものだ。その大学の「Japanologie研究所」との研究交流および業績交換のための公文の交換は、山内助教授留学により具体化され、私の東欧出張の機会に本年6月26日産経研・海外研を代表して、リンハルト所長との間で話し合いが行われた。当日は、私たちグループが現在続行中の研究の成果（日本海洋民の研究ー沖縄糸満系民）を報告することによって記念行事とし、夜は所長はじめ同所員の招待により、私と山内助教授が参加し、ウイーン郊外のグリンツイングのベートーベンハウス（現在ホイリゲ）で行われ、終始たのしい会であった。現在わが国に対する研究所は25以上もありヨーロッパの人々の中でも少数ながら東洋に関する研究が行われている。文学・絵画や音楽、陶磁器など東洋の影響が見られる。ウイーンはよく世紀末の都市といわれるが、新しいユーゲント・ステイルの運動を見のがすことは出来ない。私自身もウイーンフイルを10回近く聞いているし、スターツオパーやフオルクスオパーも何回かブレゲンツ・東京・福岡で見ている。アウガルテンの陶器も立派だ。学問の世界は勿論、芸術の世界においてもウイーンの影響は大きく、ウイーンを訪れる機会が多くなることを期待している。

今回、友好裡に交換が行われたことは山内助教授の苦心の演出のたまものであり、こうした努力の成果でもある。友好親善も結構だが、とくに研究面の協力を期待したい。私が沖縄の糸満系漁民についての特殊ともいえる（学問的）講演を行ったのは所員の中に沖縄問題に深い関心をもつ人々の存在を知ったからでもある。しかし、何といっても遠くはなれており日本に関する情報は少ない。書庫を案内していただいたがとくに経済学関係文献が少ないように見えた。リンハルト所長もこの分野の文献の充実に重点を置きたいようだ。学内諸氏の御協力を期待する次第である。

国際交流の新たな飛躍

第二段階に入った熊本・モンタナ間の大学交流

これまで、熊本とモンタナ間の大学交流は、本学と主にモンタナ州立大学との間で行われていたが、この度、新たにモンタナ大学と熊本大学を加えて、四大学間交流を開始することが本決まりとなった。これは、モンタナ大学マンスフィールド・センターの強い働きかけによるもので、日米友好基金からの助成を得て、3年間のプロジェクトとして行うものである。交流の内容は、①教員の交流――各大学は毎年1名の教員を1年間派遣し、1名を受け入れる、②学生の交流――各大学は毎年1名の学生を1年間派遣し、1名を受け入れるというものである。

このプログラムは、1988年から開始されることになっており、10月中に回し調印が行われた。これにより、本学は、教員の交流が、従来の隔年から毎年へ、学生交流が、短期から1年へと拡大する。学生にとっては、単位互換を含む1年間の本格的な留学制度がはじめて導入されることになり、大いなる前進といえよう。

中国、深圳大学との交流締結真近

昨年来、慎重に検討されていた中国・深圳大学との交流が年内に締結される運びとなった。交流の内容は、①教員の交換（隔年1名）と②学生の交換（毎年2名以内）である。

深圳大学との交流については、すでに海外事情研究所が研究所レベルの学術交流協定を結んでいるが、この度の提携により、大学レベルの交流に発展することになる。本学にとっては、アメリカのモンタナ9大学、韓国の大田大学に続いて、第11校目の交流大学となるわけであるが、躍進著しいアジアの国々との交流は、本学の学生や教職員にとって、大きな刺激になるものと期待されている。

1987年　国際交流EVENTS

日付	モンタナ	大田大学	その他
2月 8日	春期短期派遣留学生　出発		
3月 31日	慶田先生　帰国		
4月 2日	……	朴先生　来日	
4日	春期短期派遣留学生　帰国		
5月 11日	……	……	正規留学生歓迎会
25日	キャロル大生　来熊		
6月 18日	MUS研修団　来日		
7月 1日	モンタナ大学学長及び マンスフイールドセンター所長　来熊		
4日	キャロル大生　離熊(日本国内旅行へ)		
5日	モンタナ大学学長及び マンスフイールドセンター所長　離熊		
16日	MUS研修団　離日		
18日	……	大田大学研修団　来熊	
22日	……	……	米国ハンター大学長（ウィスコンシン州立大学次期総長）本学表敬訪問
23日	……	大田大学研修団　離熊	
	オコーネル先生　離熊		
8月 1日	キャロル大生　離日		
9月 2日	……	岩野先生　出発	

国際交流室

新メンバーでスタート!!

国際交流係長
　西村　礼二（7月）
国際交流係
　鶴田　智子（4月）
臨時職員
　橋本　聖実（6月）
　どうぞヨロシク！

○国際交流委員会メンバー
清野　健・中野裕治・広田　勇・西田勝喜・
笹山　茂・永末嘉孝・中野いく子・堀　治美
坂口周作・山下清司・西村礼二・鶴田智子
○「国際交流レター」編集委員
中野いく子・広田　勇・西村礼二・鶴田智子

熊本市大江２丁目５番１号
熊本商科大学
熊本短期大学
〒862　TEL.(096) 364－5161